

書誌調整連絡会議
2019.2.28

『日本目録規則2018年版』 の完成とこれから

渡邊 隆弘
(帝塚山学院大学 /
JLA目録委員長)

watanabe@tezuka-gu.ac.jp

『日本目録規則2018年版』(NCR2018) 冊子体(2018.12刊行)、PDF版(2019.1公開) JLA目録委員会とNDL収集書誌部の連携作業

日本図書館協会 > 委員会 > 目録委員会 > 日本目録規則 (NCR) 2018年版関連情報

日本目録規則 (NCR) 2018年版関連情報

目録委員会 / Last update: 2019.1.15 / <http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018-info> 日本図書館協会目録委員会

[規則 \(最新版\)](#) / [本規則について](#) / [過去の本文](#) / [その他の関連情報 \(記事, 資料, 書籍, プレゼンテーション等, 会議等, 委員会\)](#) / [お問い合わせ](#) / [更新履歴](#)

記事「刊行までの進行」(2019.1.15)

規則 (最新版)

『日本目録規則2018年版』を2018年12月25日に刊行し、2019年1月7日にPDF版を公開しました。

- [冊子体販売ページ](#) (日本図書館協会, 2018.12.25, 761ページ, 本体価格5,000円)
- [PDF版](#)

規則外の補足情報

『日本目録規則2018年版』刊行・公開について (2018.1.15) <http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018-info>

★ 書誌調整連絡会議とNCR2018

目録委員会とNDLの連携開始(2013)以降

年度	開催	テーマほか
2013	2014.2.28	日本の目録規則と書誌情報の将来像 *「資料の種別」条文案公表
2014	2015.2.27	アクセス・ポイントの可能性:新しい『日本目録規則』が目指すもの *アクセス・ポイント関係条文案(第4~8,21~28章の主要部分) 公表
2015	2016.3.3	新しい『日本目録規則』:記述の規定を中心に *第2章主要部分条文案公表
2016	2017.3.16	利用者志向の図書館目録を目指して:新しい『日本目録規則』 とFRBR
2017	2018.1.18	新しい目録規則は何をもたらすか:フランスと日本の書誌データ
2018	2019.2.28	新しい目録作成の動向

★ 書誌調整連絡会議とNCR2018

<渡邊>

- ◆ 2015年度(2016.3.3)
新しい『日本目録規則』(新NCR)策定について
- ◆ 2016年度(2017.3.16)
新しい『日本目録規則』の意義
—FRBRモデルへの対応
- ◆ 2017年度(2018.1.18)
「日本目録規則2018年版」(仮称)の概要と意義
- ◆ 2018年度(本日)
『日本目録規則2018年版』の完成とこれから

★目次

0. 書誌調整連絡会議とNCR2018

1. NCR2018の経緯・構成・特徴

策定の経緯、方針
構成と特徴

2. NCR2018完成にいたるいくつかの 論点

3. NCR2018のこれから

★NCR2018策定の経緯

昨年度会議スライド

2006	『1987年版改訂3版』刊行
2010.9	抜本的な改訂の方針を表明(JLA目録委)
2013.2	NDL「書誌データ作成・提供の新展開」
2013.9	JLAとNDLの連携作業に
2014~	書誌調整連絡会議で順次条文案公開
2016.10-11	関係機関からの意見聴取
2016.11-12	序説、総説その他条文案公開
2017.2	「全体条文案」公開 「2018年版」(仮称)に



★NCR2018完成に向けて 昨年度会議スライド
に少し加筆

2017.3.5	関西検討集会
2017.5.12	東京検討集会
2017.7.31	パブリック・コメント×切

引き続き、JLAとNDLの連携作業
 パブリック・コメント対応、その他残課題対応

2018.3	「予備版」をPDFで公開
2018.4~	付録作成作業、全体調整作業
2018.12.25	冊子体刊行
2019.1.7	PDF版公開

ほぼ予定通り「本版」

★ **NCR2018策定の基本方針** 昨年度会議スライド

- ◆ **国際標準(ICP等)に準拠**
=FRBRを基盤とする規則
- ◆ **RDAとの相互運用性の担保**
エレメントの設定は、基本的に対応
- ◆ **日本における出版状況、目録慣行に配慮**
あえてRDAと異なる本則とする箇所も
- ◆ **論理的でわかりやすく、実務面で使いやすく**
あえてRDAと異なる構成をとる箇所も
- ◆ **ウェブ環境に適合した提供方法**
「Toolkit」は当面開発せず

★ **NCR2018の全体構成** 昨年度会議スライド

序説(Introduction)

第1部 総説 (第0章 総説)

第2部 属性

〈属性の記録〉 セクション1~4(第1~12章)

〈アクセス・ポイントの構築〉 セクション5(第21~32章)

第3部 関連 セクション6~8(第41~47章)

付録(用語解説を含む)

★ NCR2018の全体構成

昨年度会議スライド

第2部 属性
〈属性の記録〉

FRBRの実体ごとの章立て
RDAよりも忠実？

セクション1 属性総則

第1章 属性総則

セクション2 著作、表現形、体現形、個別資料

第2章 体現形

第3章 個別資料

第4章 著作

第5章 表現形

セクション3 個人、家族、団体

第6章 個人

第7章 家族

第8章 団体

セクション4 概念、物、出来事、場所

第9~11章 未刊 第12章 場所

★ NCR2018の全体構成

昨年度会議スライド

第2部 属性
〈アクセス・ポイントの構築〉

属性の記録そのものとは
切り離し

セクション5 アクセス・ポイント

第21章 アクセス・ポイントの構築総則

第22章 著作

第23章 表現形

第24~25章 未刊(体現形、個別資料)

第26章 個人

第27章 家族

第28章 団体

第29~32章 未刊(概念、物、出来事、場所)

昨年度会議スライド

★ NCR2018の全体構成

第3部 関連 **RDAとはやや異なった章配置**

セクション6 関連総則
 41章 関連総則

セクション7 資料に関する関連
 42章 資料に関する基本的関連
 43章 資料に関するその他の関連
 44章 資料と個人・家族・団体との関連
 45章 **未刊**（資料と主題との関連）

セクション8 その他の関連
 46章 個人・家族・団体の間の関連
 47章 **未刊**（主題間の関連）

昨年度会議スライド

★ NCR2018の特徴

FRBRを基盤とすることによる特徴	FRBRモデルに密着した規則構造 典拠コントロールを明確に位置づけ 全著作の典拠コントロール 関連の記録 資料の内容的側面と物理的側面の整理 → 機械可読性の向上
RDAとの相互運用性の担保に伴う特徴	エレメントの設定(増強など) 語彙のリスト 意味的側面と構文的側面の分離 → 機械可読性の向上
その他、日本の事情等による特徴	「読み」等に関するルール 書誌階層構造の考え方 日本の出版状況、目録慣行を考慮

★FRBRを基盤とすること による特徴(1)

昨年度会議スライド

◆FRBR等モデルに密着した規則構造

◆典拠コントロールを明確に位置付け

「著作」「個人」「団体」等も実体として、諸属性を設定
(従来の規則では、「標目」「参照」の規定のみ)

◆全著作の典拠コントロール

著作の典拠形アクセス・ポイント(AAP)

= 優先タイトルと創作者(作成者)のAAPを結合

野坂, 昭如, 1930-. 火垂るの墓
園部, 三郎, 1906-1980; 山住, 正己, 1931-2003. 日本の子どもの歌

意義は大きい、1987年版からの大きな転換

★FRBRを基盤とすること による特徴(2)

昨年度会議スライド

◆関連の記録

実体の属性とは別立てで重視

目録提供時のリンク機能が無理なく提供できる

◆物理的側面と内容的側面の整理

内容的側面(著作・表現形)を、これまでより重視
資料種別の再編成(RDAに準じる)

表現種別 表現形の種別
テキスト、地図、楽譜、演奏、話声、静止画、二次元動画、三次元動画...
機器種別、キャリア種別 体現形の種別
冊子、シート、ビデオディスク、ビデオカセット... *キャリア種別の例

こうしたことにより: 機械可読性の向上
システムが適切に操作できるデータ

★RDAとの相互運用性の 担保に伴う特徴

昨年度会議スライド

◆エレメントの設定(増強など)

RDAのエレメントに対応した結果、大幅に増強
注記、「その他の形態的細目」等を細分

◆語彙のリスト

転記によらない多くのエレメントに、語彙リスト

◆意味的側面と構文的側面の分離

区切り記号法等のエンコーディングは扱わない

こうしたことにより：機械可読性の向上
システムが適切に操作できるデータ

書誌フォーマットは大きな問題(MARC?)

★目次

0. 書誌調整連絡会議とNCR2018

1. NCR2018の経緯・構成・特徴

2. NCR2018完成にいたるいくつかの
論点

「全体条文案」以降の検討を中心に

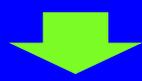
3. NCR2018のこれから

★NCR2018完成までの条文公表等

年月	公表部分	公表方法
2014.2	「資料の種別」(現#2.15,#2.16,#5.1)	書誌調整連絡会議 (会議後、NDLウェブサイト)
2015.2	アクセス・ポイント関係 (第4~8,21~28章の主要部分)	書誌調整連絡会議 (会議後、NDLウェブサイト)
2016.3	第2章の主要部分 (#2.1~#2.10,#2.14~#2.33)	書誌調整連絡会議 (会議後、NDLウェブサイト)
2016.11	序説、第0章、第1章、第2章の残部、第3章、 第4~5章の残部、第12章、第41章~第46章	NDLウェブサイト
2017.2	「全体条文案」(全章条文、付録なし)	NDLウェブサイト
2017.4	用語解説(委員会暫定案)	JLAウェブサイト
2018.3	「予備版」(全章条文、付録は一部のみ)	JLAウェブサイト
2018.12	冊子体刊行	PDF版はJLAウェブサイト
2019.1	PDF版公開	(内容は冊子体と同一)

★全体条文案から本版まで

**全体条文案
(2017.2)**

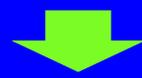


検討集会
パブコメ募集

「パブリック・コメントその他検討課題への対応について」
https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/mokuroku/consideration_results201803.pdf

かなりの規模の変更
 もともとの検討課題
 パブコメ等対応

**予備版
(2018.3)**



内部検討

「「予備版」以降の変更事項について」
<https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/mokuroku/changes201812.pdf>

あまり大きな変更なし
 予備版段階で大枠固定
 付録整備に伴う変更等

**本版
(冊子2018.12)
(PDF2019.1)**

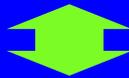
★ 完成にいたる論点： 規則名称

「目録規則」を使い続けるのか？

AACRはRDA (Resource Description and Access)に
規範性を緩めた名称(例:ガイドライン)のほうが

『日本目録規則2018年版』

図書館コミュニティを超えた相互運用性は大切
従来より自由度の高い規則



基本的な適用範囲は図書館の目録作成
国際目録原則(ICP)では「目録規則」の語を使用
NCRとしての継続性

★ 完成にいたる論点： 概念モデル

新しい枠組みの説明が不足

規則内でFRBRモデルの説明があるべき
新規の用語や意味合いの変わった用語の説明も

総説(第0章)の整備

- #0.3(本規則が依拠する概念モデル)を追加
 - 概念モデル図(FRBRモデルを一部修正)
 - 実体、属性、関連の説明
 - 名称、識別子、統制形アクセス・ポイントの説明
- #0.5(本規則の概要)
 - エレメント等について説明(従前から)
 - #0.5.1.4(実体の記述)を追加

★ 完成にいたる論点： 全体構成

属性とアクセス・ポイントを扱う章の分離の是非
RDAとも異なり、使いにくいのでは
例：著作の記録に、第4章と第22章を両方参照の要

そのままの構成

統制形アクセス・ポイントはエレメントでないとの認識

統制形・読みの規定(属性総則)の位置？

典拠データ、アクセス・ポイントにこそ必要なのに遠い

そのままの位置

第2章が長大なので遠く見えるが、第12章までの総則
第4章以下を適用する前提として使用されたい

★ 完成にいたる論点： 全体構成

体現形と個別資料を扱う章の分離の是非
手元の資料を見て作業が行われる

そのままの構成

規則構造は実体別のほうがわかりやすいと判断

実体とエレメントの対応に疑義のあるものが

例：賞(#5.26)

見直しは行わず

エレメントはRDAと一対一対応で相互運用性
個別には議論の余地がありそうなものもあるが...

★ 完成にいたる論点： 基本用語(訳語)

「資料」

resourceは「資源」のほうが(「資料」は有形を連想)
著作～個別資料を指すときと、体現形のみを指すとき

「資料」のまま

目録の対象として、最もわかりやすいと判断
「電子資料」等も定着
「体現形」への置き換えも検討したが、結局併用
その箇所のわかりやすさ優先
「資料自体」「資料外」など

★ 完成にいたる論点： 基本用語(訳語)

「著作」

workは「作品」のほうが(「著作」はテキスト偏重)

「著作」のまま

「作品」にも問題(ふつうは文学・芸術)
FRBR以前からの用語(訳語)を尊重

「家族」

familyは「家」のほうが(アーカイブズでは一般に「家」)

「家族」のまま

図書館領域で用いられる形(「家族名件名」等)を優先

★ 完成にいたる論点： 基本用語（訳語）

「作成者」

creatorは「創作者」のほうが（著作との関連を明確化）
メタデータ関連では「作成者」が一般的との指摘も

「創作者」に修正

別の文脈で「データ作成者」等を使用
紛れのなさを優先

agentにあたる用語（個人・家族・団体の総称）

RDA等で採用
たとえば「行為主体」など

今後の課題（今回は採用せず）

★ 完成にいたる論点： 基本用語（訳語）

「出版年」か「出版日付」か（その他も）

RDAではdate

「出版日付」等に修正

月日の記録も考えられるため
原則年表記のものは「年」（生年、学位授与年など）

「製作（manufacture）」と「制作（production）」

同音で非常に紛らわしい

「制作」を「非刊行物の制作」に

長くなるが、紛れのなさを優先

★ 完成にいたる論点： 文字種と読み

文字種の別

極めてわかりにくい

「漢字仮名まじり形」「漢字形」「片仮名形」...

「統制形の記録」の中に読みの規定

体現形のタイトルの読みはどうなるのか？

#0.9.1(表記の形)を新設し、再整理

「表示形」「翻字形」「片仮名表記形」「読み形」

#1.11(統制形の記録)は文字種別から言語別へ

#1.12(読みの記録)を新設

統制形以外にも読みの記録を行う余地

ただし、まず読みを付すべきは統制形エレメント

(体現形のタイトルではなく、著作のタイトル)

★ 完成にいたる論点： 転記

出版地、出版日付等

RDAは転記の徹底(元号、月日など)

全体条文案では、RDA方式を本則、従来方式を別法

従来方式が望ましいとの意見も

本則と別法の入れ替え(本則は従来方式)

日本の出版慣行(奥付表記等)を考慮

転記の原則という観点からは、イレギュラー

★ 完成にいたる論点： 上位レベルの記録

#2.10(シリーズ表示)の記録の範囲

全体条文案では、広く「上位レベルの表示」と捉える
特に、構成レベルからの上位(収録書・誌)も
表現に無理があるとの異論も

#2.10の範囲から除外

RDAやMARC上での扱いを検討した結果
体現形間の関連として記録
#43.3.1に例示を増強

★ 完成にいたる論点： 例示

例示の記載方法の説明が不十分

区切り記号等を用いた例がある
エンコーディングを制約しない旨を明確に

例示の増強を望む

区切り記号等の見直し

極力減らした(改行等による表示に)
特に用いる場合について、#0.8.1に明記
読みを示す場合、統制形アクセス・ポイントを示す場合
複数のエレメントの対応関係を示す場合、等

ある程度の増強

外部からお寄せいただいたものも
入れられなかったものもあり、今後の課題

★ 完成にいたる論点： 語彙のリスト

語彙のリストの理解が困難

使いそうにないものも(例:運動譜の記譜法(#5.13.4))
ほとんどの表で、用語の説明がない

語彙のリストは維持

RDAとの相互運用性を考え、RDAの用語は採用
(付録Cの関連指示子も同様)

付録B.1(語彙のリストの用語)を作成

「予備版」後、本版で作成

ほぼすべての表の用語(例外:刊行頻度(#2.12)等)

「用語解説」とは別立てで作成

RDAと異なる(リストごとが使いやすいと判断)
作業の過程で、若干の用語修正等

★ 完成にいたる論点： 付録

様々な要望(全体条文案時点では付録なし)

用語解説の充実を

データ事例集の充実を

NCR1987、RDAとのマッピングを

用語解説(付録#D)

予備版から本版までにさらに増強

語彙のリストの用語(付録#B.1)は別立て(前出)

関連指示子(付録#C)は予備版でほぼ固まる

データ事例、マッピングは規則外

更新・拡充の可能性を考えて

作成は、今後の課題(まだスケジュールは示せず...)

★目次

0. 書誌調整連絡会議とNCR2018

1. NCR2018の経緯・構成・特徴

2. NCR2018完成にいたるいくつかの
論点

3. NCR2018のこれから

規則の今後
目録委員会の今後
実装への期待

★これから：短期（～2019.3）

冊子体第2刷

若干の誤植修正（「第1刷正誤表」公表）
PDF版も修正

LOD対応データ（機械可読データ）

実体、エレメント、語彙のリストの用語（含：関連指示子）
付録B,C,Dから
Excel入力した、簡易な形で
名称（日英）、定義域、値域、上位項目、定義等

★これから：規則の今後

序説の末尾(4-3)に「検討すべき問題」を列挙

IFLA LRM対応

FRBRの第3グループの実体を扱う章

体現形・個別資料に対する統制形アクセス・ポイント

属性の記録としての上位／下位書誌レベルの情報

和古書・漢籍に関する規定の充実

語彙のリスト等における日本独自の用語の検討

★これから：目録委員会の今後

NCR2018の維持活動

正誤表、質問対応、問題管理
データ事例、マッピング

「検討すべき問題」(序説)への優先順位づけ

NCR2018に関する
JLAとNDLの連携は
今後も継続

NCR2018の普及活動

研修会等(各種依頼対応)
チュートリアルとなるもの？

各種の研究的活動

IFLA LRM、新RDAなどの理解・評価

その他

★その後の課題(私見)

2015年度会議スライド

◆データ作成機関の対応

NDLは対応するとして、NACSIS-CAT等は？

◆「対応」の内実

特に、これまでと大きく異なる部分への対応
著作(、表現形)の典拠コントロール
関連の記録

現NCRよりも、自由度の高い規則
これまでと変わらないデータも許容される
(それでは、新規則の意味があまりない)

NDLの適用細則(他の機関への影響もあるかも)

◆刊行後の維持体制

刊行して終わりではない
今のところ公式には、刊行までの協力体制のみ

★最後に: NCR2018の意義

昨年度会議スライド

◆特徴は多々あるが、特に

著作の典拠コントロール
これを含め、機械可読性の向上
書誌サービスの向上、幅広いデータ利活用の可能性

ただし、実装・運用にかかっている面もある
これまでよりも、自由度の高い規則
=これまで通りでも「違反」にならない

作っているデータの意味を問い直す必要

★これから：実装に期待

毎年くりかえしになりますが...

さまざまな特徴を生かすのは、実装・運用

これまでよりも、自由度の高い規則
＝これまで通りでも「違反」にならない

作るデータの意味を問いつつ、実装を...

NDLをはじめとして、
本日お集まりの機関のみなさまに期待

★ NCR2018関連資料(委員会によるもの)

◆ JLA目録委員会サイト

日本目録規則(NCR)2018年版関連情報

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018-info>

日本目録規則2018年版(PDF版条文) <http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018>

◆ 雑誌記事

日本図書館協会目録委員会「『日本目録規則2018年版』:完成までの道程」

『図書館雑誌』113(1), 2019.1. p.32-33.

渡邊隆弘「新しい「日本目録規則」のすがた:何が新しくなるのか」『現代の図書館』

55(4), 2017.12. p.167-176

* 特徴を述べた文章で、最もまとまったもの

◆ 概要資料

日本図書館協会目録委員会編『「日本目録規則(NCR)2018年版」(仮称)

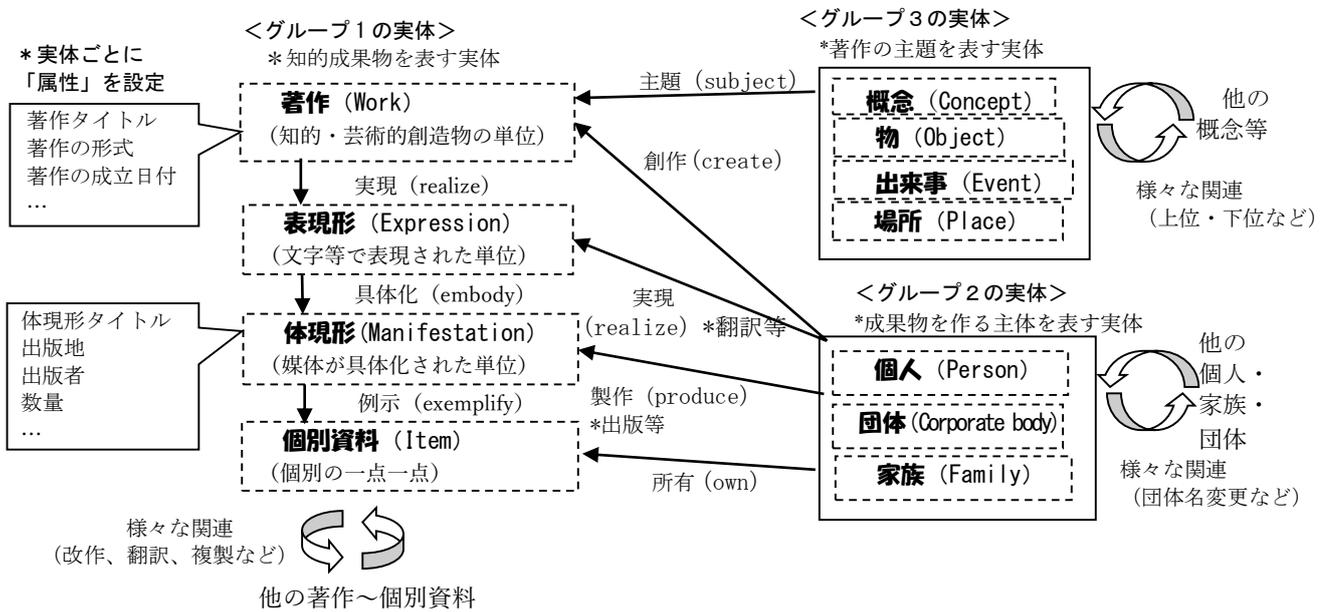
全体条文案概要:付. 検討集会の記録』日本図書館協会, 2017.9, 132p.

* 全体条文案について、章別に要点を解説(検討集会資料)

条文は古くなっていますが、細かな解説は他に作れていないので挙げました

別紙：概念モデル

●FRBR モデルの概要（『全体条文案概要』より）



●NCR2018 第0章（総説）

#0.3 本規則が依拠する概念モデル

本規則が依拠する概念モデルは、FRBR等の概念モデルを基本としている。FRBR等は実体関連分析の手法を使用した概念モデルであり、実体、関連、属性をその構成要素とする。

本規則が依拠する概念モデルの概要を、図0.3に示す。

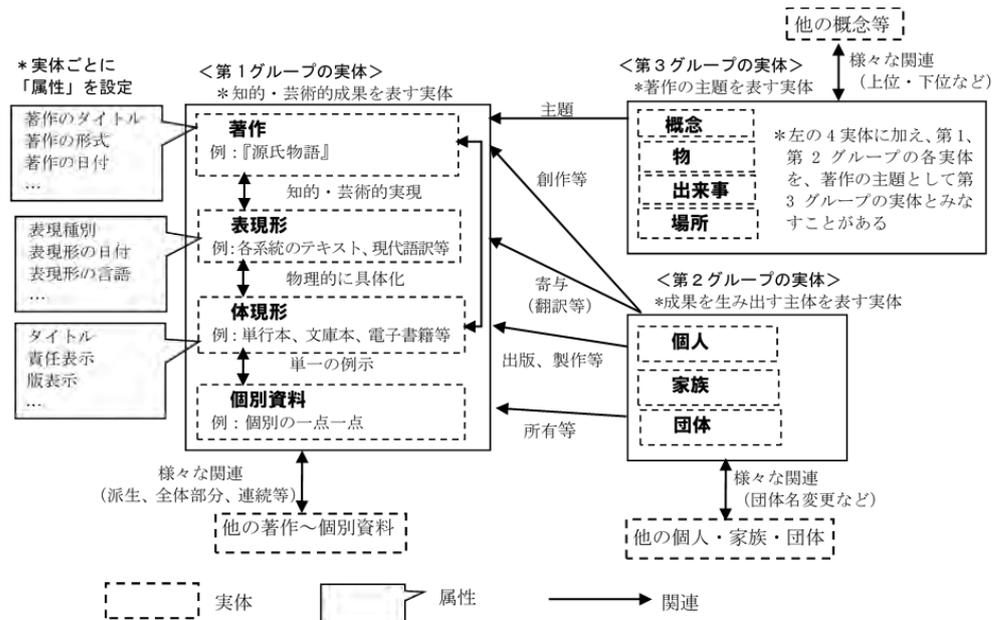


図0.3 本規則が依拠する概念モデルの概要